

令和七年気良歌舞伎

白浪五人男

稲瀬川勢揃いの場

配役

弁天小僧菊之助

忠信利平

赤星十三郎

南郷力丸

日本駄右衛門

〔音楽①〕↓〔唄〕

白浪の　ここに寄するや江の島の

(弁天出) 弁財天と云う名さえ　青海原の舟唄や

(忠信出) 初音と名さえ忠信が　龍に翼の　ねぐら鳥

(赤星出) 一重か八重か夕霞　あかつき近き　赤星が

(南郷出) 世にも轟く雷の　その南郷の　真砂路や

(駄右出) 沖を越えたる親船の　ちようど揃うた　春の手枕

〔音楽①終〕

弁天　雪ゆきの下したから山やま越こしに　まずここまでは落ちのびたが

忠信　行く先さきつまる春はるの夜よの、鐘かねは七ななつか六浦川むつらがわ

赤星　夜明よあけぬうちに飛石とびいしの、須崎すさきをはなれ船ふねに乗り

南郷　故郷こきょうをあとに三浦みうらから、三崎みさきの沖おきを乗りまわさば

駄右　陸くがと違ちがって波なみの上うえ、人目ひとめにかかる気遣きづけいなし

弁天 しかし六浦の川端まで、乗っ切る暇は遠州灘

忠信 油断のならぬ山風に、追風か追っ手の早風にあえば

赤星 艫櫂にあらぬ一腰の、その梶柄の折れるまで

南郷 腕前見せて切り散らし、かなわぬ時は命綱

駄右 碇を切って五人とも、帆綱の縄に

五人 かかろうか

〔音楽②↓〕（五人男花道から舞台へ）

（ツケ、捕手が並ぶ）

〔↑音楽②トメル〕

捕手全員 動くな

駄右 こりや、わいら何とするのだ

捕手一 何とするとは知れたこと

捕手二 賊徒の張本 日本駄右衛門

捕手三 それに従う四人の者

捕手四 いざ尋常に腕

捕手全員 まわせ

駄 右 おお、斯く露見の上からは、卑怯未練に逃げはせぬ、一人びとりに名を名乗り、縄にかかって刑罪

五人 うけん

捕手五 して真つ先に

捕手全員 進みしは

〔音楽③↓〕（五人男後ろ向きから前向きへ）〔↑音楽③トメル〕

駄 右 問われて名乗るもおこがましいが、生まれは遠州浜松在、十四の年から親に放れ、身の生業も白浪の、沖を越えたる夜働き、盗みはすれど非道はせず、人に情けを掛川から金谷をかけて宿々で、義賊と噂高札に回る配布の盪越し、危ねえその身の境涯も、最早四十に人間の、定めは僅か五十年、六十余州に隠れのねえ、賊徒の張本、日本駄右衛門

弁天

忠信

赤星

さてその次ぎは江ノ島の岩本院の稚児上がり、ふだん着慣れし振袖から、鬘も島田に
 由比ヶ浜、打ち込む浪にしつぽりと、女に化けて美人局、油断のならぬ小娘も、小袋坂
 に身の破れ、悪い浮名も龍の口、土の牢へも二度三度、だんだん越ゆる鳥居数、八幡さ
 まの氏子にて、鎌倉無宿と肩書きも、島に育つてその名せえ、弁天小僧、菊之助
 続いて後に控えしは、月の武蔵の江戸育ち、幼児の折から手癖が悪く、抜け参りからぐ
 れ出して、旅をかせぎに西国を、回つて首尾も吉野山、まぶな仕事も大峯に、足を留め
 たる奈良の京、碁打ちと言つて寺々や、豪家へ入り込み盗んだる、金が御嶽の罪科は、
 蹴抜けの塔の二重三重、重なる悪事に高飛びなし、後を隠せし判官の、御名前騙りの、
 忠信利平

またその次に列なるは、以前は武家の中小姓、故主のために切取りも、鈍き刃の腰越や、
 砥上ヶ原に身の錆を、砥ぎなおしても抜け兼ねる、盗み心の深翠り、柳の都谷七郷、
 花水橋の切取りから、今牛若と名も高く、忍ぶ姿も人の目に、月影ヶ谷神輿ヶ嶽今日ぞ、
 命の明け方に、消ゆる間近き星月夜、その名も赤星十三郎

南郷 さてどんじりに控えしは、潮風荒き小ゆるぎの、磯馴の松の曲がりなり、人となつたる

浜育ち、仁義の道も白川の、夜船へ乗り込む船盗人、波にきらめく稲妻の、白刃で脅す

人殺し、背負つて立たれぬ罪科は、その身に重き虎ケ石、悪事千里と言うからは、どう

で終い木の空と、覚悟は予て鳴立沢、然し哀れは身に知らぬ、念仏嫌えの、南郷力丸

駄右 五つ連れ立つ雁金の、五人男にかたどりて

弁天 案に相違の顔ぶれは、誰白浪の五人連れ

忠信 その名もとどろく稲妻の、音に聞こえし我々は

赤星 千人あまりのその中で、極印うった頭分

南郷 太えか布袋か盗人の、腹は大きい肝つ玉

駄右 ならば手柄に

五人 からめてみよ

捕手 それ

(皆々キマル。幕)